

キリスト教と近代化の諸相 現代キリスト教思想研究会

2008年3月 89～100頁

国民国家の形成と民族主義運動の勃興 同化と独立の狭間に立ったユダヤ人

堀川 敏寛

はじめに

本研究では、シオニズム運動への関わりを通して形成されたマルティン・ブーバーの社会思想を主題とする。ブーバーのシオニズムへの参与は、彼の「ユダヤ」に対する関心と切り離せないものであり、それはブーバーがユダヤ人、ユダヤ民族をどう扱ったかに通じる問題である。ブーバーの社会思想形成には、テオドール・ヘルツル、グスタフ・ランダウアー、フランツ・ローゼンツヴァイクという三人の友人との交流が、ブーバーの思想形成に大きく関わっている。これら三人の友人はそれぞれ短命で、ヘルツルとは6年、ランダウアーとは18年(特に1902年にウィーンのヘルツルから完全に身を退き、ベルリンに来てから深く交わっている。)ローゼンツヴァイクとは9年という短期的な交流であった。ただ、この三名はブーバー思想形成の上で最重要ともいえる影響を与え、その交流は集約的なものであった。

まず1897年の第一回シオニスト会議で出会ったヘルツル(1902年まで)とは、学生時代のブーバーをシオニズム運動へと誘う大きなきっかけを与えた人物である。ブーバーがユダヤ民族独自の国家建設を目指した理由は、ヘルツルと同じく西洋型国民国家を打破するためであった。ただその方法がヘルツルと大きく異なっていた。次に1899年に出会ったランダウアー(-1919)からは、社会主義思想の影響を受けた。特にブーバーが描いていたシオニズムを通して建設される具体的な国家像は、ランダウアーの社会主義思想を具現化するものであった。その独自性は、ユートピア思想を社会主義と宗教を結びつけることで、共同体レベルでの自治を目指す点にある。最後に1921年に出会ったローゼンツヴァイクとは、彼が死去する1929年まで密接な交流を行い、特に『我と汝』(1923年)執筆に当たってローゼンツヴァイクの思想は大きく影響している。ローゼンツヴァイクはブーバーと出会う以前から、自身の論文をブーバーが編集する雑誌「Der Jude」に寄稿し、それが却下されると言った形で交流があった。しかし両者が出会うに至ったのは、ローゼンツヴァイクが1921年に『救済の星』を書き上げブーバーがそれを読んだことから始まる。そこでブーバーは、お互いが「言葉」に対して同じ理解を持っていると言っている。その後ローゼンツヴァイクが設立したフランク

フルトのユダヤ自由学院にてブーバーは Religion als Gegenwart という題目で講義を行い、同時に二人はヘブライ語聖書の独語訳を行ったのである。以上、ブーバーの社会思想形成に当たって、この三名から受けた影響を順に見て行くことは有意義であると思われる。

今年度は初年度であるので、ブーバーがシオニズムに参加するに到ったヨーロッパ社会の背景とユダヤ人問題の実情を見てみたい。それによってヘルツルを始めとする民族主義運動としてのシオニズムが起こった理由を明らかにしたいと思う。最終的にはそこからブーバーが取ったシオニズムの方向性を検討したいので、今回は紹介のみに留め次年度の課題とする予定である。

1. 国家の形成と、国民の誕生

産業革命とフランス革命を契機に、イギリスやフランスなどで先駆けて近代国民国家が勃興して行った。近代国民国家の前身となる中央集権国家は、16世紀のイギリス、17世紀のフランス、18世紀のドイツにおいて絶対王政として成立していた。国民国家では、多民族を全て形式的に「国民」とみなし、一個人の自由を認める形体をとる。当然、国民を形成しそこでの同一性を確保する上で強化されるのがナショナリズム(国家主義)である(早尾、2008、45頁)。そしてこの近代国民国家の出現と民族主義の高まりは、ユダヤ人に対してアイデンティティーの問題を突きつけることになった。それをブーバーは民族(Volk)から国民(Nation)へと概念が変化したと特徴付けている。欧州のそれぞれの国民国家は、この流れの中で、異教徒であるユダヤ人共同体を、どう対処するかが現実問題となったのである。

その中で、ユダヤ人解放(市民権)と同化主義は、この時代の正義であり、「ユダヤ教はあくまで宗教であって、ユダヤ人はホスト国の国民である」という発想が流布していた。特にドイツ、フランスでは同化に対して積極的であった。ドイツ社会では、1932年までにキリスト教徒との混合婚が、全体の3分の1を占め、キリスト教への改宗者も増えて行った。フランス革命は、ユダヤ人を民族的に解放したのではなく、個々人に自由を与える方向を取った。したがって解放運動の先に待っていたものは、それぞれの居住地における文化への同化であった。西洋文化に信頼を寄せるユダヤ人はこの方向を受け入れ、進んで同化の道を歩むようになったのである(小坂井、2002、25頁)。

同化を促進した「改革派」は、

・ヘブライ語の祈祷文を簡潔化してドイツ語の解説を加える。

オルガン伴奏を導入するなど礼拝儀式のドイツ化

安息日を日曜日に規定する(ベルリンの改革派教団)。

共産主義や労働運動などの政治的イデオロギーに身を投じた
ホスト社会の様々な分野で文明の進歩に貢献しようと試みた（18世紀メンデルスゾーンの
啓蒙期以降）。

新正統派は

生まれ育ったドイツに国民として帰属し、文化的に同化することは可能だ。そして民族
の紐帯は国土ではなく、モーセの律法に求めようとする立場を取った。

それはガンディーが、自身が監修している新聞ハリジャン紙にて、「ユダヤ人問題」に
ついて論評した立場である。彼は、離散ユダヤ人が生息しているホスト国とシオンの地と
の二重国家を有すことに対して反論した。これら同化を考えたユダヤ人は、アイデンティ
ティーをユダヤ民族として意識するのではなく、ドイツ国家において近代市民としての権
利を持つユダヤ教徒として意識したのである。そこには「個人として」自立する意図が
あり、彼らはユダヤ人として認知され、目立つことを逆に嫌ったのである。それは彼らが
自らのユダヤ性を排除し、国家に所属する一国民として認知されなかったためである。例
えば1880年代初頭に、ロシアのポログムを逃れてドイツに流入してきたロシア系ユダヤ人
難民問題に際して、彼らの具体的な避難地としてユダヤ人国家建設の主張が出された。そ
の際ドイツのユダヤ人は、反ユダヤ主義者の勢力が強まることを危惧したのである。

2. 同化の行き詰まりとシオニズムの誕生

フランスでは、フランス革命後の1791年にユダヤ人に対して市民権が与えられ、パリは
リトアニアのヴィリニユスや、スペイン追放後のアムステルダムと並んで、離散ユダヤ人
が安全に暮らせる都市であった。ただ市民権が与えられてから一世紀経った19世紀後半、
欧州では「ユダヤ人排斥」の機運が高まってきたのである。1880年代には、オーストリア
＝ハンガリー帝国にてボヘミアにおけるユダヤ人狩りとガリチアの火打ちや、ロシアでの
ユダヤ人への乱暴狼籍が勃発した。

テオドル・ヘルツル（1860-1904）は、自らが担当していたドレフェス事件をきっかけ
に、同化の道ではユダヤ人問題は解決しえないと考えた。彼は、ブダペストで生まれ、ウ
ィーンで高等教育を受けたドイツ語圏ユダヤ人である。ヘルツルはウィーンの新聞 Neue
Freie Presse 紙のパリ特派員として、ドレフェス事件を目撃し、その後オーストリア市議会
選挙で反ユダヤ主義候補の躍進を取材するため帰国した。ヘルツルを動かしたユダヤ民族
国家建設の理由をまとめると次のようになる。

- ・ドレフェス事件で感じた欧州世界における同化の行き詰まり
- ・19世紀後半より盛んになったロシアと東欧でのユダヤ人迫害に伴う難民の増加
- ・西洋近代的ナショナリズム（民族主義・植民地主義）の機運

ヘルツルはジャーナリストであり『ユダヤ人国家』（1896年）も論文というよりは声明文にちかきものである。彼はその政治的駆け引きに長けた人物で、短期間に集約的に活動して理念レベルに留まっていたシオニズム¹を実現化へ向けた大きく前進させた。それまではモーゼス・ヘスに代表されるように、ユダヤ精神の復興とその自覚を促す運動であったのだ。それをヘルツルは、19世紀後半という政治的には国民国家が主導的に、経済的には産業革命による生産体制が変化した時代状況に合わせて、反ユダヤ主義とナショナリズムの台頭の解決策としてユダヤ人国家の設立を唱えたのである。彼は、ユダヤ人の入植を経済的に支援するために、資本家ロスチャイルド家（ロートシルト家）に接近した。次に彼は土地に対する執着はなく、国家建設地として当初はアルゼンチン²かパレスティナか、と考えていたほどだ。さらに：彼はドイツのバーデン侯とオスマン・トルコのサルタン（アブドゥール・ハミド2世）に近づき、トルコにドイツから財政的援助を与えるのと引き換えに、パレスティナ地方をユダヤ人に譲渡してもらうことを提案したが失敗に終わった（小林、1978、p.19）。彼はパレスティナではアジアに対する防波堤として全ヨーロッパと連携することを考えたのである。そしてパレスティナへの望みが断ち切られるに及んで、ヘルツルは第6回会議にて、キプロス、シナイ島、ウガンダなどの候補地も提案したが、これまた会員からの大反対にあった。

これらの流れの中で、ヘルツルのような西欧知識人は、施策を練る理想的なアイデアを形成したが、それは問題点の方が多かった。実際に、彼が1896年に発表した『ユダヤ人国家』は社会的インパクトをもたらし、翌年からシオニスト会議が開催され、彼はその議長としてシオニズム運動の先駆者となったが、会議はまとまることなく、また彼は非現実的であるとの評価を受けた。

『ユダヤ人国家』において考えられる問題点として、

- ・ 古代ローマ法に発する政治理論。篡奪・転化に添加しかねない国家業務の代執行
- ・ 経済政策上では、資本主義的企業と集団的労働との混合を目指す Mutualismus。
- ・ 近代技術への妄信と西欧文明への無批判な依拠
- ・ 七時間労働制などの社会主義的な施策の安易な導入

¹ シオニズムという語は東欧のナタン・ビレンバウムの造語で、シオンの地に宗教的共同体を待望する運動であったが、ヘルツルがこれジャーナリスティックに用いたことによって世界的な認知を持つようになったのである（手島、2002）。

² アルゼンチンを選んだ理由は、すでに多くのユダヤ人が現地に入植しており、自然に恵まれ、広大な平野を持ち、気候も穏やかで、人口が希薄であるというものである（ヘルツル、1991、33頁）。

- ・ 絶頂期にあった大英帝国の植民政策の模倣
- ・ エルサレムを訪れるキリスト教徒への丁寧な配慮は示されても、現地在住のアラブ民族に対する言及は見られない。反対に、西欧のためにユダヤ民族がアジアに対する防壁の一部となる、と記すのである。

ドレフェス事件の調査を家族から依頼された（1896年に告発文書「誤審 ドレフェス事件の真実」を上下両院に提出した）ユダヤ系作家ベルナル・ラザールは、ヘルツルのシオニズムをエリート主義的独善と資本主義による植民地主義と評した。ヘルツルは様々な批判や反対を受け、1904年に失意のうちに没するのである。彼の死後、外交攻勢でユダヤ人国家を実現する政治的シオニズムの流れは、マンチェスター大の化学教授ハイム・ヴァイツマンに受け継がれた。彼はアセトン（繊維・樹脂・医薬品の原料となる化合物）の大量製造法を発明し、イギリス軍部との関係を深めることでイギリス政界と深く関わるようになった。その結果イギリス政府は「バルフォア」宣言を発表することになるのである。

このようにヘルツルが先駆けとなり、イスラエル建国を実現させた政治的シオニズムは、いわば19世紀半ば以降、盛んになっていた西欧近代型のナショナリズムと結びついて進められたのである。

3. 民族と国民

また民族に関して、その虚構性、非実体性を「同一性と差異」という切り口から論じた小坂井は、シオニズムもその枠組みで分析している。イスラエル国を構成しているユダヤ人は、言語（イディッシュ語・ドイツ語・ポーランド語・ロシア語など）、宗教、習慣、身体的形質などに関して多様な背景を持つ人々が集まって成り立っているにもかかわらず単一民族として表象されている。その理由は、ユダヤ人が長い歴史を通して、敵意を持った人々によって脅かされ、さらに現在もアラブ諸国という外敵に包囲されるという外部による「差異化」である。つまり集団的同一性を支える根本は、外部がなければ内部は存在しえないという論理である。そして民族とは、この差異化（外部）によって構築された虚構としての同一性（内部）に過ぎないと小坂井は考える（小坂井、2002、14頁）。

そこからヘルツルは、シオニズム運動（内部）を発展させるために、反ユダヤ主義（外部）を利用したのである。反ユダヤ主義の脅威が強まる状況下、同化の期待を完全に断ち切り、シオニズムの悲願を成就させる上で最大の貢献をしたのは、数百万のユダヤ人を強制収容所にて虐殺したヒトラーであった。ユダヤ人総人口のおよそ三分の一を滅亡させたこの悲劇によって、ユダヤ人問題に対する最終的解決は、ユダヤ人自らの民族国家を持つ以外にあり得ないと、シオニストは主張できたのである。ホロコースト（大量虐殺）の衝撃は、一挙にしてシオニズムの信頼性を増大させたのである（上掲書、26頁）。

小坂井は、ユダヤ人問題解決のためには、次の四つの可能性があったという。第一は各国家の内部に少数民族として居住し続ける方向、第二は解放から「同化」に至る道、即ち民族としてのユダヤ人を消滅する方向、第三はヒトラーが採ったように物理的に絶滅させられる方向、そして第四に他の民族と同様に国民国家を形成する方向である。もしも降らず革命による個人的自由の解放後に周囲がユダヤ人に対する迫害を辞め、友好的関係を築くのであれば、国家イスラエルは成立しなかったに違いない、と小坂井は述べている（上掲箇所）。というのも第二次世界大戦後、どの国も生き残った10万人ほどのユダヤ人の受け入れを渋ったため、ユダヤ人が同化する道は完全にふさがれてしまったのである。

次に、民族と国民に関するランダウアーの解釈を三つの引用から検討してみたい。ここで取り上げるランダウアーの思想は、ブーバーが『ユートピアの途』（1950）の中で、引用しながら、彼について解釈されたものである。

「国家とは一つの関係性、人々のある関係、人々が互いにとる態度のある様式である。」（Buber, 1950, S.887）しかし国家的関係性は秩序であり、それは「民族」（Volk）と呼ばれる別の関係性によって克服されうる。民族は人々の間に実際に存在するが、しかしまだ団結や連合ではなく、まだより高次の有機体になっていない結合体であるとランダウアーは考える。

「民族（Volk）はまた、国民（Nation）と称せられるものの最も内面的な現実、従って国家化や政治化が廃止される時にもなお残るもの、即ち本質的共同体、多様性の中での存在の共同性を含んでいる」（ibid., S.890）。

「共同体の精神に基づく諸民族（Völker）の復興のみが、救いをもたらすことができる」（ibid.）。

これらランダウアーにおける国民（Nation）と民族（Volk）との差異は、非常に示唆に富んでいる。ランダウアーによれば、民族とは人と人との社会的関係性（もしくは交わり・共同性）の最も根底的レベルに存在するものである。人と人が共同の精神に基づいて交わり、関係を築くことで構成されるものが民族であり、それが国家化・政治化されたものが国民である。そしてこれらの関係性によって構成される一つの秩序を「国家」と呼ぶのである。したがって民族（Volk）は、ある特定集団を称するものではなく、「民衆」や「民」と訳出する方が適しているかもしれない。

このようにランダウアーの「民族」理解は、まさに後々ブーバーの思想的核心になる「我-汝」の対話思想に通じるものがある。またそれが次に検討するブーバーの文化的シオニズムを支える民族理解にもなりえると思われるため、次年度の課題として是非検討してみたいと考えている。反対にヘルツルに代表される政治的シオニズムにおける「民族」理解

は、国民と対立概念として用いられる。国民が国家の一員として個人を称するものである一方、民族は一集団の総称であり、個人としてではなく集団としてアイデンティティーが示される位置集合体を指している。したがって政治的シオニズムでは、「国民国家」に対抗する形で「民族国家」の建設が進められたのである。

4. ブーバーのシオニズムへ

ウィーン大学の学生であったブーバーは、1897年の第一回シオニスト会議に出席し、たちまちこのユダヤ民族主義の情熱にとらえられ、このメンバーとして積極的に運動に参加していく。ブーバーは、ヘルツェルと同じく、ウィーンにて教育を受けて育ったドイツ語圏の知識人であり、西洋近代的なナショナリズムの影響化で育ちながら、幼い頃の憧憬としてハシディズム研究に対する関心を持つものであった。

ブーバーは、学生時代をウィーンにて過ごし、そこでシオニズムの提唱とシオニスト会議への傍聴を経験し、同時にラングウアーの社会主義思想の影響を受けた。だがヘルツェルの死後（1904年 - 1913年）は、もっぱらハシディズム研究に没頭し、政治活動を中断している。彼がシオニズムの政治運動を本格的に始めるのは、第一次世界大戦後であり、それは宗教社会主義思想への取り組みと並行して為された。

ブーバーは、精神的なものと現世的なものとの根底的分割のうちに、近代社会を悩ませている個人主義化や人格の疎外の根源を見ていた。つまり彼が民族主義的な関心に向かった理由には、西洋的な個人主義化批判のためと言えよう。その中でブーバーは、ウクライナのアハッド・ハーアムが提唱する精神的シオニズムの考えを継承する。「精神的」と言われるのは、エレッツ・イスラエルがユダヤ人にとって必要なのは、ヤハドゥート（Judaism・ユダヤ精神・ユダヤ性を含む広い概念）を獲得するためと考えられたためである。ハーアムはアラブ民族の権利を擁護するよう努め、ユダヤ性から逸脱した政治的シオニズムに反対した。この精神的シオニズムの特徴は、離散したユダヤ人の精神的中心としてのヤハドゥートであり、全てのユダヤ人がエレッツ・イスラエルへと移民する必要はない。むしろユダヤ的価値を体現するための精神的国家には世俗的利益に関心のあるユダヤ人が移民することは許されないとするものであった。

ブーバーのシオニズムは、離散したユダヤ人を精神的に結びつけるという目的において、ハーアムと同じである。異なる点は、ブーバーがユダヤ人の宗教的結合にエレッツ・イスラエルが欠かせないと考えたところにある。ハシディズムに伝統を持つ東欧系ユダヤ人は、シオンの地は聖地エルサレムとダビデが築いたシオンの丘なくして考えられないと強く要求したのである。以上、ブーバーのシオニズムの基本的立場を見たが、その具体的内実は、「教育」がベースとなる。以下それらについて3点分紹介したい。

聖書のドイツ語訳

ブーバーは、ローゼンツヴァイクが死去する 1929 年まで、主に 1920 年代に集約的に翻訳作業を行った。またこの翻訳の意図と目的について、論文を執筆した。翻訳は、西洋独語圏の離散ユダヤ人を対象にしたものであり、彼らにヘブライ語聖書における根源的ユダヤ性を伝える目的からであった。具体的には、ヒエロニムスとルター訳の聖書を西洋化し、そこでユダヤ的な威厳が損なわれたため、彼は黙読から音読を基本とするヘブライ語原語のリズムと韻を大切に、できるだけ非日常的なドイツ語やイディッシュ（ポーランド圏のドイツ語）の単語を使うことを心がけたのである。³

フランクフルトの自由ユダヤ学院での教育活動

翻訳と並んでブーバーが力を入れた運動が、ユダヤ人の成人教育である。ここでの目的も同じである。ローゼンツヴァイクによって設立、指導されたフランクフルトの自由ユダヤ学院において、彼は講義を担当した。『我と汝』（1923 年）の草稿は、ここでの講義を基として書かれたものである。

ヘブライ的人文主義

ブーバーは 1913 年に彼によって集められたサークルにおいて、ドイツにおけるユダヤ的田園教育舎（*jüdischen Landerziehungsheim*）の計画を協議した時、設立されるべき教育プログラムが「ヘブライ的人文主義」の名で提示された。ここでブーバーは次のように講じた。

西洋がかつて古代の「言語」と「書物」に人間の造形力を見出したように、ユダヤ民族も新たな中心的作用を可能とするような強大な力が、民族の教育設立のために必要である。そしてその力を古代イスラエルの言語と書物から見出すことによって、新たなユダヤ的威厳を持った人間を形成し得るであろう（Buber, 1933, S.1087）、と。

二度目にこの語が使われた場所は、1929 年の第 16 回シオニスト会議での講演である。ここでブーバーは、当時のパレスティナで実施されている教育システムにおいて欠けていることに対して自らが望むことを次のように発言した。

私が経験してきた 30 年に及ぶ民族的ユダヤの運動では、確かに民そのものに活力を与え、言語そのものを新たに出来たが、我々は次のことを見誤った。それは秩序づけ裁くという行いに基づいて、我々民族の根源形体が生起し、秩序づけ裁く言葉の上で、この言語の偉大な根源文書が基礎づけられることである。それゆえに一連の民族運動は、ナン

³ だが残念なことにこの翻訳が完成し、出版されたのは 1950 年代だった。この時期は、対象としていた読者層に読んでもらうには遅すぎた。

センスな形式的“ルネッサンス”に膨れ上がってしまっている。私はむしろ、この形体や文書を今一度振り返ることによって、規範となるべき根源力の再生を目指すことにこそ、古き郷土の上で新たに始められる共同体の未来は依存している、と考えている（ibid.）。

このヘブライ的人文主義は、西欧的人文主義の影響から考察するきっかけが得られたものである。ブーバーは、ブルダッハ⁴の『人文主義の起源』を参照し、そこにおいて記されたダンテの『饗宴』における格言「諸物の根源へと遡る」ことと、その遡及における「全ての内的生の具体的な変革」、またゲーテがローマで「古代の造形的芸術作品の現状において」自らが「最も純粋な状態における人間へと回帰させる」⁵よう感じたことなどが、ヘブライの人間を育成する精神的運動の目標であると考えた（Buber, 1933, S.1088）。それによれば「人文主義者」とは、古代文化を単に史的素材として受け入れる者ではなく、彼が古代文化からその性質に従ってあの「遡及」が彼にとって有用に振興すると思われるものを採り上げる者である。

従ってブーバーは、ヘブライ的人文主義は最も純粋な状態におけるユダヤ人としてのヘブライの人間を、ユダヤ教から探し出す予見的選別にのみ起因し、だから我々の人文主義は聖書へと向けられると、考えるのである。第16回シオニスト会議の講演で、最後にブーバーは次のように示した。ヘブライ的人文主義とは、ヘブライの人間形成を意味する。そしてヘブライの人間とは、ただヘブライ語を話す人間とは全く異なるものである。その人間とは、ヘブライ語聖書の中で彼に向かって語られる声によって、その声のヘブライ的言語の中で語りかけられる者である（Buber, 1933, S.1089-1090）。

ブーバーは、ユダヤ民族のアイデンティティーと独自性を確保し、精神的な拠り所と勇気を与えることが必要と考えた。それと同時に、パレスティナにて先住民族を迫害し武力衝突に走る傾向にある実践的シオニズムに歯止めをかけ、今一度自民族が神へと向きなおす道を示す必要であった⁶。そういった意味で彼は、ユダヤ人を個人としてではなく民族としての方向性を探っていたのであり、ユダヤ人国家建設という目標ではヘルツルと同じであっても、その実態は両民族一国家（Bi-national state）であり、その具体的方法が「内面的扇動」（die innere Agitation）「ユダヤ文化の育成」（Pflege der jüdischen Kultur）「民族教育」（Volkserziehung）である。ブーバーが力を入れるヘブライの人間の形成とは、このよ

⁴ 原注：Konrad Burdach, Über den Ursprung des Humanismus, in: Reformation, Renaissance, Humanismus (1918). 「人文主義の起源について」『宗教改革・ルネッサンス・人文主義』、1918年

⁵ 原注：Burdach, a. a. O. S.201

⁶ ブーバーは、アラブ民族と共生する道を考え、40年代にはユダ・マグネスと共に「イフロード」（統一）というグループを作った。

うなユダヤ文化の保護とそれに基づいたユダヤ人の成人教育なのであり、それをブーバーは、ヘブライ的人文主義という名で提唱し、シオニスト会議で講演を行ったのである。

まとめにかえて

ヘルツルのシオニズム思想とその立場は、出発点においてブーバーのそれと同じであるため、非常に興味深い。両者はともに、当時のヨーロッパ社会におけるユダヤ人の同化に限界を感じ、独立を目指してシオニズムの運動に傾倒していった。ただし両者は「民族」に対する解釈の根本的な違いがあった。ヘルツルは、ナショナリズムの流れに乗って、ユダヤ民族の独立国家を一日も早く建設することを急いだ。そのため全てにおいて、大英帝国の植民地政策を参照し、大国の政治家間の駆け引きを利用することに熱中した。反対にブーバーは、アーレント同様にヨーロッパ型の国民国家に限界を感じており、ユダヤ人だけの国家を目指すシオニズムでは、結局その反復に成りかねないことを感じていた。彼はシオニズムの根幹として、まずユダヤ人の民族としての精神的統一を目指す上での文化的教育的努力を主張したのである（小林、1978、p.20）。この両者の食い違いは1899年の第三回シオニスト大会から現れ始め、最終的に1902年に両者は袂を分かつようになるのである。

最後に、ヘルツルとブーバーの思想的立場やユダヤ人問題に対する視座が、結局は西洋近代的な視座から生み出されたものであったことについて論じることで、この論考を締めたいと思う。ヘルツルはユダヤ人国家建設地として、パレスティナに限らずアルゼンチンとイギリス植民相から示された英領ウガンダをも挙げていたが、現地に対して無知であり、現に住む人々への配慮は為されていなかった。これはユダヤ系知識人が、西欧的な教養の中で育ち、19世紀の西欧近代国家にて起こったナショナリズム思想に強い影響を受けていたためと推測しうることであろう。

同様にブーバーが唱えたヘブライ的人文主義も、西洋型のヒューマニズムをユダヤに適応させる努力であった。ユダヤルネッサンスとして彼が企図したヘブライ的人文主義は、西洋型的人文復興をヘブライ語とヘブライ聖書に置き換えることによって為されたものであった。また彼が提案した両民族一国家論も、ユダヤ人がパレスティナへ入植することを前提として考えられたアイデアである。したがって現代の我々の視点からすれば、真にアラブ側の立場を考慮するのならば入植そのものが間違いであり、シオニズム運動はいくらアラブとの共生のうちで進めたとしても結局はユダヤ側のエゴイズムに終止しているとも言える。それはブーバーらが西洋文化の枠組みで育った思想家であり、そして20世紀前後という当時の時代背景から考案された思想だということを留意しておきたいと思う。

参考文献

- ・ Martin Buber, *Pfade in Utopia* (1950), “Werke –erster Band. Schriften zur Philosophie-“, München: Kösel-Verlag, Heidelberg: Verlag Lambert Schneider, 1962.
- ・ Martin Buber, *Biblischer Humanismus* (1933), “Werke –zweiter Band. Schriften zur Bibel-“, München: Kösel-Verlag, Heidelberg: Verlag Lambert Schneider, 1964.
- ・ 市川裕 「レヴィナスにおけるタルムード研究の意義」 『レヴィナス ヘブライズムとヘレニズム』 哲学会編、有斐閣、2006年。
- ・ 小坂井敏晶 『民族という虚構』 東京大学出版会、2002年。
- ・ 小林政吉 『ブーバー研究』 創文社、1978年。
- ・ 手島勲矢 『わかるユダヤ学』 日本実業出版社、2002年。
- ・ 富岡倍雄 『パレスチナ問題の歴史と国民国家—パレスチナ人と現代世界—』 明石書店、1993年。
- ・ 早尾貴紀 『ユダヤとイスラエルのあいだ 民族／国民のアポリア』 青土社、2008年。
- ・ ヘルツル・テオドール 『ユダヤ人国家 ユダヤ人問題の現代的解決の試み』 佐藤康彦訳、法政大学出版社、1991年。
- ・ ブーバー・マルティン 『ひとつの土地にふたつの民』 合田正人訳、みすず書房、2006年。

ほりかわ・としひろ （京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

